



人権・部落差別問題学習が非認知能力を育てる ～自分自身の差別をなくす学びから、

人が尊敬される社会を実現する学びへと変えていく～

人権教育課 課長 松浦 透

皆さんもご存じの通り、栗東市内では就学前から小学校、中学校まで、「十里まちづくり」を教材として、部落差別問題学習を行っています。それは、地域名を出してでも正しいことを知ってほしい、部落差別をなくしたいという地域の願いを受け止め、栗東市全体で取り組んできたものです。その実践は全国的にもあまり例をみない素晴らしい取組である一方で、例年通りに行えばよいというものでは決してなく、目の前の子どもたちを思い浮かべて、毎年工夫されたものでなければなりません。多忙な毎日をお過ごしの中で、その準備は決して容易なものではありません。ではなぜ、私たちはそうまでして部落差別問題学習に取り組むのでしょうか。

それは部落差別解消に向けた取組が、被差別部落に生きる子どもたちの「解放の力」と「自己実現力」を伸ばす取組であると同時に、被差別部落以外のマイノリティの子どもたち、さらにはすべての子どもたちの「生きる力」を伸ばす取組になるものだからです。昨年もこの場で触れたとおり、「解放の力」とは、自分の力を信じ、仲間とつながり、ともに差別をなくす生き方をめざす力のことを意味します。「自己実現力」とは、自分の10年先、20年先のなりたい姿にむけて、自分で見通しを持ち、挫折しそうになってもあきらめずに学び続ける力のことです。これはまさに栗東子育て教育 Next プロジェクトに掲げられている「自分を高める力」「自分と向き合う力」「他者とつながる力」と同じことを意味します。

部落差別問題学習は「部落差別はいけない」という「正しいこと」を学ぶためだけにあるものでは

ありません。わかりきった「正しいこと」を学ぶ時間は楽しくありません。「人は差別はいけないとわかっているのに、なぜ差別してしまうのか」「自分が当たり前だと思っていたことは本当に当たり前のことなのか」「多数派にいて安心している自分はこれでいいのか」、そんなことを目の前の子どもたちの今に応じて、ともに考えていくことが部落差別問題学習の最大の効果であり、魅力です。

かつて私は中学校で「差別をなくす生き方」を考えようと子どもたちとともに学習を組み立ててきました。しかし、今振り返って、それでよかったのかと反省しています。自分の生き方と重ねずに、厳しい差別の現実だけを伝えてしまうことは、部落差別に対する忌避意識を教えてしまうことになりかねません。自分の弱さを認め、人と比べるのではなくそのまの自分を大切に、仲間とつながり、差別をなくそうとする生き方。しかし、それが個人の中だけで完結しては、今の社会（子どもたちにとってそれは学級であり学校でしょうか）における様々な矛盾や差別の構造をなくそうと立ちあがることはできません。

今取り組んでみたい部落差別問題学習は、子どもたちとともに不合理な社会を変える行動を創っていく学びです。学級で部落差別の不合理さを通して社会の矛盾を学び、「どうせ私なんか」と下を向いているすべてのマイノリティの子どもたちが、さらにはすべての栗東の子どもたちが、自分はそのままで大事な存在であり、差別がある社会を変えていきたいと逞しく生きていけるような、そんな部落差別問題学習を組み立ててみたいと考えています。

令和5年度 教育研究奨励事業

今年度は、各校園より個人研究・共同研究合わせて12編の研究奨励論文の応募がありました。それぞれの研究を支援するために、滋賀大学教育学部准教授の北村拓也氏を講師に迎え、5月に「研究の進め方講座」、10月に「研究のまとめ方講座」を実施しました。

講座の様子や受講者の声をご紹介します。



研究の進め方講座

日時：令和5年5月12日（金）

場所：栗東市役所2階第1会議室



～受講者の声より～

- 研究の進め方に少し不安に思うことがありましたが、見通しを持つことができました。自分のしたいことと子どもたちの実態に合わせてテーマの設定ができればと思いました。具体的な活動内容も見えてきました。特にまずは仮説の部分をより考えて、適切な検証となるようにしたいです。
- 大変わかりやすい講話でした。どのように研究したらよいのか、迷いや不安ばかりでしたが、具体的にアドバイスしてくださり、わかりやすかったです。自身の学びのためにも一生懸命取り組みたいと思います。
- 本校の実態把握に努め、自身の授業改善につなげる必要があることを改めて感じた。今年度の研究を活かし、自己の資質向上につなげていきたい。



研究のまとめ方講座

日時：令和5年10月27日（金）

場所：栗東市役所2階第1会議室



～受講者の声より～

- 講義を聞いて、自分の実践したことをまずは整理して、それから事実と考察を論文に書いていかないといけないことが分かりました。一年間で子どもがどのように変わったのかやなぜ変わったのか、どの手立てが有効だったのかを考えていきたいです。
- 研究のまとめ方についてよく分かりました。変化する後は詳しく述べていたが、確かに変化の前はなかなか詳しく書けていなかったのもので、より伝わりやすくするためにその部分にも力を入れて取り組んでいきたい。
- まとめ方について分からないことや不安に思っていることがあったが今回の講義を受けて論文のイメージができた。しっかりまとめられるよう実践をくり返していきたい。



『こどもも 大人も 心が動く自然との出会い』

【講師】 幼児課 神門 則子 氏

◆ネイチャーゲーム プログラム体験

自然となかよくなるために、園庭でネイチャーゲームをしました。普段、保育で大忙しの先生方。自然いっぱいの園庭で、ゆったりと素敵な時間を過ごせました。「見ているようで見ていない」周りの自然の良さに、あらためて気づくこともできました。

カモフラージュ



自然の中に人工物がかくれているよ！
いくつ見つけられる？

ふくろうの置物がかくれているよ！

園庭の宝物探しをしよう！
「ちくちく」「いいにおい」「赤色」
「鳴き声」「くものす」など・・・

フィールドビンゴ



園庭のファッションショー



絵本「わたしのワンピース」を見たあと、
ワンピースの模様探し！
どのワンピースも素敵な模様～♪



◆講義『こどもも 大人も 心が動く自然との出会い』

乳幼児にとって「自然との出会い」は重要です。自然の中で心を開放し、自然の不思議さや美しさを感じたり、生きものへの親しみや愛情をもったりするとともに、好奇心や探求心を育み、科学的な見方や考え方の芽生えを培う機会となります。そして、「なぜ？」「もっと知りたい」という好奇心や探求心は、学習を支える土台、すなわち「非認知能力」の育成にもつながります。幼児期に体験していることが、小学校以降の学びにつながっていくことについてもお話いただきました。

しかしながら、その自然体験ができにくくなってきており、園生活において、積極的に自然を取り入れた保育環境をつくることが求められます。この研修では、園環境について改めて考える機会となりました。自然と直接ふれあい、自然からメッセージを感じる体験の大切さについても学ぶことができました。

◆受講者の声より

○保育者自身が、子どもたちにどんな自然体験をさせたいのかを考え、周りに自然がない中でも、できる工夫はあるのではないかと改めて考える良い機会となりました。

○3種のネイチャーゲームから、人それぞれ感性も異なるので、共感する心が大切だと学びました。

○日頃から、自然とふれあう体験を取り入れ、子どもたちがわくわくするような環境設定を心がけたい。

○子どもたちと一緒に自然と関わるには「大人も楽しい」が大切だと感じました。

さあ、自然の中に出かけてみましょう！





『いきいきと遊ぶ 大西っこ』

栗東市立大宝西幼稚園

大宝西幼稚園では、一人一人が「面白そう」「やってみたい」「楽しい」「もっとしたい」と心動かし意欲的に取り組む姿を大切にしています。空き箱制作での場面です。自然物をセロテープで箱に接着をして何度も取れてしまい「なんで取れてしまうのかなあ」と困っていたAさんがいました。近くでボンドを使っていたBさんから「ボンド使ったらくっつくで」と教えてもらいボンドで接着すると翌日にはしっかりと接着されていました。この出来事を通して素材によって、接着できる物と出来ない物があるという事に気付くことができました。

子どもたちは「どうしたらいいのかな」「なんでだろう」と物と対話的に関わり、自分が作りたい物をどのようにして作ればいいのか試行錯誤する中で「自分はこうしたい」と自ら選択したり友達と一緒に遊びを進めたりしています。そして形にできた時の満足感「また作ろう」と主体的な姿に繋がっていきます。私たち保育者は「じっくり遊びこむ時間や場所の保障」「子どもの思いを形にできる教材」「子どもと一緒に心揺さぶられる保育者」を大切に身近な環境を整えるようにしています。そしてたくさんの「気付き」「発見」をしてほしいと願っています。



『はっきり話し、しっかり学ぶ やさしさあふれる まいにち元気な 葉山っ子』

栗東市立葉山小学校



本校の校歌は、「清く流れる野洲川を はるかこえゆくハイウェイ」という歌詞で始まります。本校のすぐそばを走る名神高速道路や、栗東インターチェンジは、昭和の時代、本市の前身となる栗東町を新興工業地区に成長させた象徴であり、その利便な土地柄ゆえに、現在も多くの工場や企業に囲まれています。

さて、本校は今年4月、「子どもの読書活動優秀実践校」として文部科学大臣より表彰を受けました。これまで司書教諭や学校司書を中心とした「ブックトーク」や「出張図書室」、「読書通帳」の活動をはじめ、図書委員会の児童による「本の読み聞かせ」や「本のスタンプラリー」「読書週間の取組」など、子どもたちが本と出会う場を数多く作ってきました。



こうした実践が認められたことを契機に、今年度はさらに子どもが主体的に読書活動を行えるよう、子どもの意見を聴く機会を増やし、子どもの視点に立った読書活動を推進しています。

